筑波大学留学の思い出

Siti Rafiah Sulaiman（シティ・ラフィア・スライマン）
Malaysian National Institute of Translation, Head of Translation Department

私は日本で教育を受けたいという夢を持っていた訳ではなく、もしかするとマレーシアのジョホール[1]の小さな町バツパハトに住む平均的な地方大学の学生で満足していたかも知れません。しかし、5年間の中等教育の後、1983年に日本留学生の候補となったときにすべてが変わりました。この留学制度は1980年にマハティール（後の首相）による「LookEast政策」で作られたものです。学生と教師を日本と韓国に派遣し、積極的な労働意欲を学び取り入れるためでした。この2つの国はマレーシア政府によって自国の文化と言葉を維持しながら科学技術を発展させたモデルとして選ばれました。

私たち留学生には2つの仕事がありました。それぞれの専門分野で知識を高める事と、マレーシア政府の若き文化使節となることでした。若手の使節として私たちは日本の数多くの前向きな姿勢を倣うことを期待されました。それらは体力的にも精神的にもかなりチャレンジングな仕事でした。

2年間の予備学習があったとしても、日本語を修得する困難さを想像してみてください。まず2年間の日本語コースとクアランプールにあるマレーシア大学における科学の基礎教育を受けましたが、マレー人であったため漢字を習ったこともなく、ひらがなと漢字が混じる日本語は難しい言葉でした。それでも、様々なサポートや指導と日本への一歩を踏み出す決意に押されて、ついに事前教育を終えました。そして他の44名の学生と共に留学生第二陣として日本に派遣されました。

1985年4月に私の筑波大学での留学生生活が始まりました。最初はカルチャーショックに何度も見舞われました。15℃から20℃の気温は24～33℃のマレーシアと比べると、春にもかかわらず肌寒さを感じました。またお風呂や給湯、イスラム教の食事を作るための台所がなく、共同浴場は

日本文化の一部ですが、イスラム教徒の私には大問題でした。イスラム食はつくばにはほとんど無かったので自分で作る必要がありました。そのため先輩と共にアパートに移りました。家賃が高いことを除いてずいぶん暮らしやすくなりました。マレーシア政府経由で受けた日本の奨学金のおかげで、他の私費留学生に比べて余裕がありました。

筑波大学ではマレーシア政府が決めた工学系のコースに入りました。本当はコンピューターサイエンスにも興味があったのですが。2 年の導入教育を母国で終えた時、日本語に多少自信がわいていました。しかしそれは大きな間違いだったことを最初の日本語の講義を受けて悟りました。筑波大での講義はマレーシアでの講師に比べて早口で進度も速く、私はほとんど講義を理解できませんでした。

私の勉学上の多くの問題に助言をくれる先生に出会いました。齋籐先生からは私が勉強や留学生としての生活を進められるように助言をいただきました。数多くの教科を理解するのにチューターにも助けてもらいました。マレーシアの先輩からの精神的な支えや、経験に基づく生活や学習についての助言は思いやりに満ちていました。

同級生の日本人女子学生が十人ほどいて、彼女たちとつきあうことでも励まされました。彼女たちもまた科学技術の学習に奮闘していました。私の場合は日本語を完全に理解していないため、さらに深刻でした。数学の単位が取れなかったため、3年生の時には住先生に特別クラスを開いてもらいました。単位を落とした理由の一つは日本語を理解していないことで、それが原因で数学的な概念が解らなかったことが、後で判りました。3、4 年では応用物理を専攻しました。内容はチャレンジングでしたが、勉学はより円滑に進むようになりました。専門教科を理解するために頻繁に図書館に出かけ、英語の教科書を参考にしましたが、これは大変役立ちました。田崎・喜多研の先生や先輩に助けられ、1989 年の 3 月に卒業しました。

今でもなお 17 年前に卒業した筑波大学のことを夢で見ます。日本での学生時代は、私の甘い思い出であり続けます。勉強に忙しかったけれど、楽しい思い出がたくさんあります。休みには日本人のクラスメートやマレーシアの友達と日本中を旅しました。選択科目で地理を取ったときは、筑波山や伊豆に出かけました。週末には東京のマレーシア大使館や他の協会が催す様々な行事に出かけました。東京、神戸、京都、大阪を始め九州や北海道にも行きました。東京ディズニーランドには一人で 3 回も行きました。体育のクラスではテニス、ゴルフ、

剣道を生まれて初めて経験し楽しみました。冬にはマレーシアの友人とスケートやスキーに行きました。つくばの雪景色はとてもすてきでした。雪景色は母国では決して見られないので先輩たちと雪の中を散歩し、写真を撮って楽しみました。ただ買い物しているときでさえ、特に春、秋、冬の間、日本での毎日は喜びで満ちていました。

何も予定がない週末には、私は自転車やバスでつくばの中心に買い物に出かけました。そして、自分のアパートでクラスメートやマレーシアの友人にマレーシア料理を振いました。また、時間があれば私は友人を訪ねて様々なことを議論しました。友人との会話は、一人ではないという安心感を与えてくれ、精神的なストレスを解消させてくれる最高の方法でした。

Hari Raya Aidilfitri はイスラム教徒には断食の後の大事なお祝いです。他のマレーシアの人たちと東京にある大使館の宿舎で過ごしました。数多くのマレーシアや日本の料理が振る舞われ、私が今まで経験した中で最も楽しいお祝いでした。

私は筑波大学では平均的な学生でしたが、筑波大生としての誇りを感じました。多くの人が日本で10指にはいる国立大学で、日本人でさえ入るのが難しい大学で学べたことを幸運だと言ってくれました。

2 年生からは先輩となり、今度は後輩をガイドする番です。勉学を決してあきらめてはいけない事を後輩にも、自らにも言い聞かせました。私たち留学生は家族や国家の期待をうけて、成功しなくてはならないのです。遠く離れた家族とは電話と手紙で連絡しました。当時はインターネットがなく、4年間に夏休みに2回帰っただけでした。それはまた家族と会い、私の悩みや喜びを地元の友達と分かち合う機会でした。

マレーシアに帰ってから日本で勉強する機会を得たことに感謝しました。冒険をすればするほど、視野が広がるという事は確かです。もし日本に来なかったら、私のこの国に対する印象は「ウルトラマン」や「おしん」にとどまっていたでしょう。特に仕事の上で、挑戦するという姿勢を経験から修得しました。

日本語の読書の文化も私の印象に残りました。バスや電車、喫茶店、公園など、至る所で本を読んでいる日本人を見かけました。その本は学術書、漫画、小説、雑誌と多彩です。私も読書に惹かれるようになりましたが、留学中はほとんどの時間を学術書と雑誌に費やしました。

日本の大学とマレーシアの大学の違いは卒業前に就職先が見つけられることです。私の場合、幸運にも東京とマレーシアに拠点がある 2 つの日本企業から就職の声がかかりました。最終的にはマレーシア松下を

選択しましたが、私を面接した責任者は私が筑波大の留学生であることに感心しました。筑波大学に入学することが並大抵ではなく、筑波大卒業生ならば松下で勤務することに何の問題もないことを知っていたからだと思います。

マレーシアに帰ってからも留学で身につけた「改善」の考えを基に、常に自分自身を高める努力をして日本的仕事の流儀の適用に努めました。日本やマレーシアで日本人の上司と働き、多くの経験を重ねました。松下勤務（1989-1993）の間、毎年日本、特に大阪と京都に出張し、そのときには同窓生とも会いました。

私は現在、Institut Terjemahan Negara Malaysia（ITNM）[2] で仕事しています。この会社はマレーシア政府から翻訳と出版に関わる業務を委託されていますが、ここでも私は日本の仕事の流儀を守っています。2006年6月に再び東京を訪れる機会がありました。この時は日本の出版と翻訳の状況を調べる事が目的でした。日本の出版業界は2005年に7万8千冊の新刊を出版し、その10%は翻訳です。また急速に発展する情報技術からe-bookや携帯電話などの恩恵を受けています。この機会に私は筑波大学を十数年ぶりに訪ねました。町はつくばエクスプレスや新しい建物など、見違える程に発展していました。

私はもはや日本に住んでいませんが、常に本、インターネット、LookEast同窓生や日本在住のマレーシア人を通して日本に注意を払っています。幸運にも切れかけていた筑波大学とのつながりを筑波大学のウェブサイトを通じて再び持てました。マレーシアに移り住んだ高齢の日本人がマレーシアを第二の故郷だと思うように、私は日本を第二の故郷と思っています。私の中で日本はより完成され、清潔でよく組織され、その社会は規律に満ちた愛すべき国として、特別な意味を持ち続けます。

私の経験が筑波大学の留学生やthe Land of the Rising Sunで学習に励む人たちと共有でき、役に立つことを望みます。

〔注〕

1）ジョホール：シンガポールに接する工業と農業の中心地

2）Institut Terjemahan Negara Malaysia（ITNM）：教育省の管理下にあるマレーシア政府出資の会社
URL：http://www.itnm.com.my/

（シティ・ラフィア・スライマン／マレーシアにおける翻訳及び出版）

和訳：喜多英治（数理物質科学研究科教授）